

「やさしい日本語」の本質とその必要性

一橋大学国際教育センター准教授 庵 功雄

現在ニューカマー（新来外国人）と呼ばれる定住外国人の数が増えてきています。その背景には、日本の少子高齢化、生産年齢人口（15～64歳の人口）の長期的減少傾向や人材の流動のグローバル化があります。つまり、成功の場を海外に求めようとする外国人の増加と、外国人の力を必要とする日本社会の要請が同じ方向性を示しているのです。

このように、国境を越えた人材の移動が常態化することがこれからの世界において必然的なものであり、それによって日本社会も大きな恩恵を受けるとすれば、その人たちが日本で自己実現をしていけることを日本社会として保証する必要があります。これは個人の手には余り大きな問題ですが、少しでもその役に立ちたいという気持ちから私たちは「やさしい日本語」という考え方を提案しています（「やさしい日本語」という用語は弘前大学の佐藤和之氏によるものが知られていますが、以下で言う「やさしい日本語」は庵 2009などで定義しているものを指します）。例えば、「高台に逃げろ！」という文がわからないとき、「高いところに逃げてください。」と言えば、外国人への伝達効率はずいぶん上がります。このように日本語を伝わりやすく組み立てたものが「やさしい日本語」です。

「やさしい日本語」は多言語化していない現在の日本において外国人が不利益を被る度合いを減らすためのものです。具体的には、「やさしい日本語」では文法をこれまでの日本語教育で「初級」とされているものと比べて大幅に刈り込んでいます（刈り込みの具体的な内容については庵 2009を参照）。一例として、条件を表す表現には「と、ば、たら、なら」の4種類があり、初級でもその使い分けが問題とされますが、「やさしい日本語」では「たら」だけを採用しています。こうした「一機能一形式」が「やさしい日本語」の特徴です。

「やさしい日本語」は日本人住民と外国人住民との共通言語としての側面も持っています。これまで日本では、日本社会に参加しようとする外国人に一方的に日本語習得を求めてきました。「ここまで来たら（＝日本人と同じレベルの日本語を習得したら）仲間に入れてあげる」という態度です。しかし、これは対等な立場に立つ市民の交流としては不適切なものです。外国人側にも最低限の日本語習得を求める一方で、日本人側も相手の日本語を理解するように努力をすべきです。そして、そうしたお互いの歩み寄りの中に共通言語として生まれるのが「やさしい日本語」なのです。

こうした「やさしい日本語」のコンセプトを具体的な教材にしたのが『にほんごこれだけ！1, 2』（ココ出版）です。この教材では「日本語を教える」のではなく、外国人の方とおしゃべりを行うプロセスの中で自然に文法が身につくというやり方を取っています。

「やさしい日本語」を普及していく際に最も中心となるのは、外国人の方と日々交流されている日本人ボランティアのみなさんです。どうか、「やさしい日本語」を使った外国人の方との交流を楽しんでください。

参考文献：庵 功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法」『人文・自然研究』3、一橋大学

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/17337>